

隠す自然

— 「楚辞」から見た「詩経」(上)

小池 一郎

私が本稿で試みようとするのは、作品、即ち書き残されたものの読み直しということである。『詩経』は紀元前千年から同六百年頃の歌謡集で、三百余篇の作品を今に伝える。その大多数は、黄河流域で詠まれていた。一方、紀元前三百年頃、揚子江中流域に位置した楚の国の歌を集めたのが『楚辞』である。前者は無名人の手になるのに対して、後者はその中心部分は屈原という一人の詩人が創った、と伝えられる。『詩経』と『楚辞』は、その時代、地域、また性格において、全く別のものとして文学史上でも扱われるのが一般であるが、中国古代の韻文集である両者が、何の影響関係も無く存したとは考え難い。私はここに、一つの「読み」の方法として、一旦『楚辞』に身を置いて、『楚辞』を通してそこから更に数百年前の作である『詩経』の諸篇を見てみようと思う。これは、『詩経』の中に屈原的、な、ものを探る試みである、と言えれば分かりやすいかも知れない。

話のきっかけとして、まず万葉歌人、柿本人麻呂の「石見国より妻に別れて上り来る時の歌」二首の一(万葉集

131)とその反歌二首(同132・133)を挙げる。

131 石見乃海 角乃浦廻乎 浦無等 人社見良目 滷無等 人社見良目 能咲八師 浦者無友 縦畫屋師 滷者無輓
 鯨魚取 海邊乎指而 和多豆乃 荒磯乃上尔 香青生 玉藻息津藻 朝羽振 風社依米 夕羽振流 浪社来縁
 浪之共 彼縁此依 玉藻成 依宿之妹乎 露霜乃 置而之來者 此道乃 八十隈毎 万段 顧爲騰 弥遠尔
 里者放奴 益高尔 山毛越來奴 夏草之 念思奈要而 志怒布良武 妹之門將見 靡此山

反歌二首

132 石見乃也 高角山之 木際從 我振袖乎 妹見都良武香
 133 小竹之葉者 三山毛清尔 乱友 吾者妹思 別來礼婆

これらの歌では、自然は、即ち藻や波や風や山々や木立や竹の葉は、寄せ合い、重なり合い、そよぎ合って、「わが妹」(愛すべき対象)を隠す。「妹」は自然によって幾重にも掩い隠されてしまつて、もはや見ることができない。これは、「われ」と「妹」の間に自然が介在して来る、心理的な状態を言うのであり、物理的可視不可視の問題とは必ずしも一致しない点に注意したい。

同じような「隠す自然」は、『楚辞』の屈原の作品にも見承けられる。例えば、「九歌・湘夫人」に、

帝子降兮北渚 帝子 北渚に降る

目眇眇兮愁予 目眇眇として予を愁えしむ

嫋嫋兮秋風 嫋嫋たる秋風

洞庭波兮木葉下 洞庭波だちて木葉下る

「帝子」(天帝の子)は「湘夫人」即ち湘水(南方より洞庭湖に流入する)の女神を指す。第二句については、宋・洪興祖「楚辞補注」は「眇眇は微かなる貌。神の降れる、望めども見ええず、我をして愁え使む」と注す。「嫋嫋」は同補注に「嫋、長弱貌」とある。秋風のそよそよと吹き続ける様。なお、二句目の「予」は、神を慕う人間、神舞における祭の主宰者(巫)である。天より降った「帝子」と「予」の間には、「嫋々たる秋風」と洞庭湖の波立つ波と、ざわざわと落ちる木の葉が横たわり、こちら側から神の姿を望見できない。自然が、人間から神を隠している。

屈原の例をもう一つ挙げよう。「九章・涉江」の一節に、

入激浦余儻回兮 激浦に入りて余は儻回し

迷不知吾所如 迷うて吾が如く所を知らず

深林杳以冥冥 深林は杳として以て冥冥たり

猿狖之所居 猿狖の居る所

「激浦」は屈原の放浪していた地、沅水(やはり洞庭湖に注ぐ)上流に当る。「儻回」は、六臣注本『文選』卷三十三では「遭迴」となっており、「遭は転、迴は旋也」との呂済の注がある。ぐるぐると巡ること。「杳」は奥深い様。「冥冥」は暗い様。また、「猿狖」はサルの種類。これに続く一節は次の通りである。

山峻高以蔽日兮 山は峻しく高くして以て日を蔽い

下幽晦以多雨 下は幽く晦くして以て雨多し

霰雪紛其無垠兮 霰と雪とは其れ紛として垠り無く

雲霏霏而承宇 雲は霏霏として宇に承く

「紛」は入り乱れて降る様。「霏霏」は、『詩経』小雅・采薇に「雪雨ること霏霏たり」とあり、毛伝（詩経の最古の注釈）に「霏は甚しき也」。自然（江水、深林、猿声、高い山々、雨雪、霰、雲）はわが行く先を蔽い隠す。ここでは、隠されるのは「慕う対象（人や神）」ではなく、「わが行く方」である。この点に関しては、やはり柿本人麻呂の「妻死みまかりし後、泣血哀慟して作る歌」（万葉集207）に付せられた短歌が連想される。（二首の中其一のみを引く。）

208 秋山之 黄葉もみぢ乎をしげみ茂 迷流まよひぬる 妹乎をもとめん將求 山道やまじしらず不知母

秋山の黄葉の茂みがわが行くべき道を隠す。「黄葉」の熟語は、中国の六朝詩には見えぬようであるが、初唐に入ると王勃（647〜675）の詩「山中」に次の例がある。⁽⁵⁾

長江悲已滯 長江 已に滞れるを悲しむ

萬里念將歸 万里 將に帰らんとするを念う

況復高風晚 況んや復 高風の晩

山山黄葉飛 山山 黄葉の飛ぶをや

王勃が四川地方を放浪中の作。同じ初唐の王績（590?〜644）「壠坂に登る」詩にも、⁽⁶⁾

風高黄葉散 風高くして黄葉散り

日下白雲滋 日下りて白雲滋し

と見える。人麻呂の「黄葉茂」にも、「飛」「散」イメージが含まれるのではなからうか。静止して茂っているのではなく、茂るように厚く飛び散るのだとすると、「九歌・湘夫人」の「木葉下る」に通ずる所があると思う。^(補)

さて、人麻呂の「山道不知母」については、また、次の歌が思い出される。「柿本朝臣人麻呂、近江国より上り来

る時、宇治河の辺に至りて作る歌」。

264 物乃部能 八十氏河乃 阿白木尔 不知代経浪乃 去邊白不母

「阿白」は「網代」、「不知代経」は「漂うばかりで前へ進まない」の意。漂い、たゆたう波が、「去邊」を隠してしまふ。少なくとも、川面を見ていると、そのような気持ちに襲われるのである。もう一度屈原に返ると、先に挙げた「九章・涉江」の少し前の節には、

乗舲船余上沅兮 舲船に乗りて余沅（水）を上る

齊吳榜以擊汰 吳榜を齊しくして以て汰を撃つ

船容與而不進兮 船は容与として進まず

淹回水而凝滯 回水に淹まりて凝滯す

とあって、渦巻く水流が、やはり船の行く手をさえぎり、隠してしまふ。（風の舞う枯葉と渦巻く波のイメージには、個々の微小な揺動が全体の激しい円還運動を形成するという点で、重なり合う所がある。）そして、行く手をふさがれた「詩人」（余）までが、渦とともに旋回しはじめる。（前述の「儻個」を参照のこと）

なおまた、屈原「九章・懷沙」の乱辞にも次のように言う。

浩浩沅湘兮 浩浩たる沅（水）湘（水）

分流汨汨兮 分流して汨たり

脩路幽蔽兮 脩き路は幽く蔽われ

道遠忽兮 道遠くして忽たり

「浩浩」は広々した様。「汨」は王逸注には「流るる也」としか記さないが、「涉江」での描写と対照してみるに、あるいは『莊子』達生篇「与汨偕出」の晋・郭象注「回伏而涌出者汨也」（回伏して涌き出づる者は汨なり）を取るべきかも知れない。⁸⁾「路を蔽う」ということで更に言えば、同じく屈原作（一説に宋玉の作という）「招魂」の乱辞には、

皐蘭被徑兮斯路漸 皐蘭徑を被い 斯の路漸る

とあって、己が進路が「皐の蘭」と「水流」によって閉ざされたことを明言している。

以上、人麻呂の歌に触発されつつ（あくまで触発されたのみで、私は本稿で人麻呂と屈原の比較をする考えはない。）『楚辞』の特に関原の作品に見られる「隠す自然」について、例を挙げて検討を加えてみた。その「隠す自然」が何に由来するかの考察はひとまず置いて、次に『詩経』の中に、類似の表現が無いかどうかを検証してみたい。

『詩経』と『楚辞』の自然描写の相異については、小川環樹「風と雲―感傷文学の起源」⁹⁾に次の指摘がある。

ブッチャーのいう「輪郭がするどく切り出されず、色彩は朦朧としており、物象は明暗の見わけがたいぼかしに よってとけあう、薄明と瞑想と神秘の世界」が、「詩経」の詩人のえがく自然よりも、「楚辞」のそれにずっとよく似ている（以下略）

ここで小川は前出「涉江」の例を引いた上で、さらにこれを『詩経』の「我が来ること東よりす、零つる雨それ濛たり」（我来自東、零雨其濛——幽風・東山）と比較して、こう述べている。

「詩経」は東征より帰ってきた兵士の心情をのべたもので、篇中には、のきは蔓草たれ下り、くもの巢におおわれ、家のかたわらのあき地には鹿の足あとしげく、夜にははたるに似た虫の光とびかうなど、出征中にあれ

はてた家のありさまを写してはいるが、しかしえがかれた物のかたちの明確さは失われていない。⁽¹⁰⁾

右の小川の見方には、私も同意するものであるが、私の今考えている「掩い隠す自然」を検討するには、少し違った観点も必要なので、敢て『詩経』にも目を配ることにする。まず最初に、青木正兒が「支那人の自然観」の中で「抒情の中に叙景の妙を兼ねたものとして古人に稱賛されて居る」として「東山」と共に引用している「秦風・蒹葭」を取りあげてみよう。全三章から成り、第二・三章は若干の字句の変化を伴いつつ、ほぼ第一章の繰り返しとなっている。今、第一章のみを引く。

蒹葭（第一章）

蒹葭蒼蒼

蒹葭は蒼蒼として

白露爲霜

白露は霜と為る

所謂伊人

所謂伊の人は

在水一方

水の一方に在り

遡洄從之

遡洄してこれに従けば

道阻且長

道阻まれて且つ長し

遡游從之

遡游してこれに従けば

宛在水中央

宛として水の中央に在り

朱子『詩集伝』は「秋水方に盛んなる時に、いわゆる彼の人者乃ち水の一方に在り、上下してこれ求むれども、皆得可からざる言う。然れどもその何の指す所なるかを知らざる也」と注す。⁽¹²⁾「指す所」は一応別にして、次に解を施す。

「蒹葭」はあし、よしの類。「蒼蒼」は茂る様。季節は秋も深まる頃。「所謂伊人」はよく分らないが、ともかく大切な人。その人の姿を川向うに見かけて、川辺をさかのぼって行ったが、霜をかぶったあし、よしの茂みにじゃまされて、いつまでも「伊人」が見えない。それで今度は川中を徒歩かちでのぼり、すぐ近くまでたどりついたはずであったが、何と「伊人」はいつの間にか流れの真中に居て、依然として深みが彼此を隔てている。末句は最後には「伊人」に会えた、と解する説もあるが、^(補)今、朱子の「水の中央に在るは、近づけども至る可からざるを言う也」に従う。三章繰り返しによって、いつまでも会えぬもどかしさが、一層つめたことであろう。蒹葭や露霜や水流が「伊人」をどこかに隠してしまったかのようなのである。この詩については「伊人」を川の神、女神に見たてる説がある^(註)。

漢廣(第一章)

南有喬木 南のかなたに喬木きょうもく有れども

不可休思 休む可からず

漢有游女 漢に游女有れども

不可求思 求む可からず

漢之廣矣 漢の広きは

不可泳思 泳ぐ可からず

江之永矣 江ながの永きは

不可方思 方いかたす可からず

南方、漢水の辺りに喬木（高くそば立つ木）があつて、その側に「游女」が居る。しかし彼女に会おうとしても、漢水は広くて泳ぎきれぬし、それに彼女は江をどこまでも逃げてゆくであろう。そのもどかしさに於いて、「蒹葭」に近く、「水」「喬木」「游女」は、「九歌・湘夫人」を思わせる。三家詩説は「游女」を漢水の女神と解した⁽¹⁴⁾。近年では、蘇東天『詩經辨義』が、「漢広」について、

これは恐らく漢水の女神を祭る、古代巫歌の一種である。屈原の「九歌」の各篇も、このような伝統を継承し、発展させて出来たものにちがいない。

と述べている。⁽¹⁵⁾「漢広」の第二章は、後半の四句は第一章後半四句の完全な繰り返しであるが、前半四句が次のように一転する。

翹翹錯薪

翹翹として錯わる薪（雑木林）

言刈其楚

言はその楚を刈らん

之子于歸

之の子于婦がば

言秣其馬

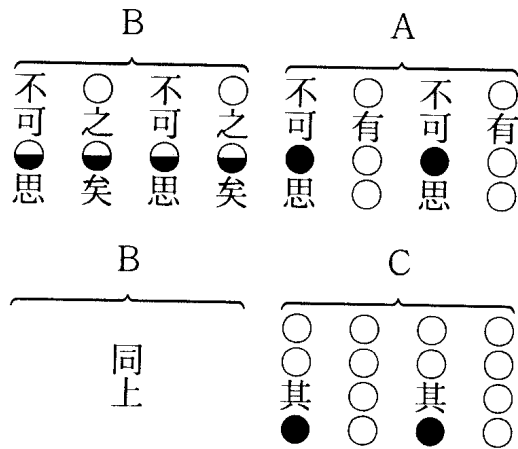
言は其の馬に秣かわん

障害（茨）を取り除いて、彼女の為になら何でもするという意思の表明。後半部で、しかしそれでも彼女に近づくことは出来ない、と続く。第一章の神女の歌が、第二章では男女の恋愛の歌に転じたのではないかと思われる。第三章も第二章にほぼ同じである。いずれにせよ。「翹翹」（多き様）と「錯わる薪」に隠された彼方に「之子」（思いをかける女性）が居り、そのはるか遠方、漢水の辺りに「游女」が居るといふ図式になるうか。確かなのは、「おい茂り、交錯する雑木」が、神本来の姿を隠したことである。

ここで「漢広」の韻律(試の形式)に眼をやってみよう。

【第一章】

【第二章】



右図で●○は押韻部(以下同)、「思」「矣」は助字である。Aの韻律が、この歌の本来の型であり、B型は、そのより詠嘆化したものと考えられる。もとは、A Bの繰り返し(A B | A B …)であった所に、Cのリズム(これが詩経に最も一般的なものである)が割り込んだのであろう。Aの韻律は、「思」を「兮」に置き換えれば、『楚辞』韻律の古型にぴったりとかさなるのが注目される。⁽¹⁶⁾「漢広」は、その原型にあっては、形式・内容の両面に於いて『楚辞』につながるものを持っていたであろう。

もう一つ韻律の面から考察を続けければ、「鄭風・野有蔓草」が「漢広」あるいは楚辞古型に近い形式を有している。
野有蔓草(第一章)

野有蔓草 野に蔓草有り

零露漙兮 零ちし露は漙なり

有美一人 美しき一人有り

清揚婉兮 清揚として婉なり

邂逅相遇 邂逅して相違わば

適我願兮 我が願いに適わん

(▲印は押韻部)

全二章で、第二章は「兮」が落ち、完全に四言リズム化している。例えば第一章の「適我願兮」に対して「与子偕臧」(子と偕に臧からん)というように。従って今は、第一章のみを問題とする。第一章は全六句構成であるが、もし末二句が繰り返しであったとすると、「漢広」のA型の繰り返しA・Aに一致する。この仮定は別にしても、「野有蔓草」のリズムが楚辞古型に連なる点は動かない。初頭二句「野有蔓草、零露漙兮」の、盛んに延び、つやつやと輝く自然の描写は、「蒹葭」のやはり初め二句「蒹葭蒼蒼、白露為霜」に類似し、前者の三、四句「有美一人、清揚婉兮」は後者の「所謂伊人、在水一方」のイメージに近い。「美一人」も「伊人」と同じく、恐らくつやつやと輝く自然の彼方に見え隠れしているのである。「邂逅相遇」についても、「美人」に遇えたか否か、解釈が分かれる。右では、未だ遇えぬものとして訓読した。この「美人」もまた「神女」と見なし得る。

少し話しを急ぎすぎたので、今までに論じた所を顧みて、若干の補足をする。

川の女神との邂逅について。屈原の「離騷」に、

吾令豊隆乘雲兮

吾豊隆をして雲に乗り

求宓妃之所在

宓妃の在る所を求め令む

とある。「豊隆」は雲の神。王逸の注に、「宓妃、儀氏女、溺水而死、遂為女神」(宓妃は「宓」儀氏の女なり。洛水に溺れて死し、遂に女神と為る)。より文学化された形であるが、水の神女への希求のテーマが、ここにも認められる。「野有蔓草」のみ、例示した『詩経』国風の他の作品とは異なって、「水」との関係を持たない。二句目の「零露漙兮」という水分の存在を強調する表現は、恐らくそれを償おうという意識が働いているのであろう。従って、実質的には、「水」を伴った他篇と異ならないと思う。

「漢広」との関連が考えられるものに、「鄭風・山有扶蘇」がある。全二章を左に挙げる。

(1) 山有扶蘇 山に扶蘇有り

隰有荷華 隰に荷の華有り

不見子都 子都を見ずして

乃見狂且 乃ち狂えるを見る且

(2) 山有橋松 山に橋き松有り

隰有游龍 隰には遊びし龍(草)有り

不見子充 子充を見ずして

乃見狡童 乃ち狡童を見る

「扶蘇」は樹木の茂る様。「子都」「子充」は男子の名、「狂」は狂人、「狡童」は、悪童。「且」は助字。「橋」は「喬」の意で、現にそうなっているテキストも有る。「龍」は草名。「漢広」と重なるのは、「喬(橋)」「游(龍)」

「不見」。「隰」は川につながろう。「游龍」は、本来の意味を離れて、「游行する神」を比喩するのではないかとも考えられる。「神」は、「九歌・湘夫人」に見えるように、水辺に在る樹木（世界樹の性格をもつ）を伝って降臨する。喬木はその記憶を宿した存在である。降り立った神は水中に潜み、また水辺を游行する。そして時として人間と邂逅する。「山有扶蘇」ではしかし、第一章に明確なのであるが、茂る樹木と咲きはこる華が、神話的記憶を推しのけてしまい、ただ慕う人との邂逅の記憶だけが残ったのである。そのちぐはぐな気分が、詩人に「狂（人）」や「狡童」と出合わせたとはいえないであろうか。

もう一つ「漢広」を解く鍵として、「召南・江有汜」を取りあげてみよう。繰り返して三章の第一章のみを引く。

江有汜 江に汜有り

之子歸 之の子帰ぐに

不我以 我を以にせず

不我以 我を以にせず

其後也悔 その後や悔いん

「汜」は川の分流。一度分れてまた元に戻る。毛伝に依る。ただし、これは詩の内容に引きずられた解釈であり、元は単に水際を言うに過ぎないとも考えられる。二句目、日本古写本に「之子于歸」に作るという⁽¹⁸⁾。「之子」と「江」がこの詩では隣接しているのが注目される。つまり「之子」も、もと神女であった可能性がある。谷川健一著『南島文学発生論』によれば、『おもろさうし』では「思ひ子の君」「思ひ子」が神女を指すと言うことである⁽¹⁹⁾。「江有汜」は、あるいは水辺で歌われる神よばいの歌であったかも知れない。

ここまで、私は『詩経』の国風（各地の民謡調の歌）の例のみを挙げて論じてきたが、小雅（宮廷歌謡の中、主として身辺雑事を歌ったもの）の諸篇にも検討すべきものが多い。次にそれらを取りあげていきたいが、その前に、ここでもう一度『楚辞』に戻って考えておこう。（続）

△注▽

本稿で引用する「詩経」及び「楚辞」の本文は、原則として左記のものに依る。

・阮刻十三经注疏『毛诗注疏』

・四部丛刊本明覆宋刊本『楚辞补注』

- (1) 宋・嚴羽『滄浪詩話』詩体に「風雅頌既亡、一變而為離騷」と言うのは、両者の間に連続性を認めているであろう。両者の影響関係を論じた近年の論者としては、張碧波、高国興「略論從△詩経▽到楚辞的詩歌發展流變問題」（『中国古代、近代文学研究』一九八八―七 復印報刊資料）がある。もと、『学習与探索』一九八八―三に発表のもの。

- (2) 以下「萬葉集」の引用に当っては、日本古典文学大系本（岩波書店 昭和三二年）及び『萬葉集 本文篇』（塙書店 昭和三八年）を参照した。

- (3) この歌については、駒木敏「小竹こたけの葉のさやぎ」（『同志社国文』38号 一九九三年）から教えられる所があった。

- (4) 六臣注本『文選』は「足利学校秘籍叢刊第三」（汲古書院）の『六臣注文選』に依る。

- (5) 『万首唐人絶句』（書目文献出版社 一九八三年）に依る。一本に「復」を「屬」に作る

- (6) 韓理洲校点『王無功文集』（上海古籍出版社 一九八七年）に依る。

(7) 唐突な感を与えるであろうが、私はここで宗左近『私の縄文美術鑑賞』（新潮選書 一九八三年）の次の言葉を引いておきたい。

「おおむねの縄文は、何と映るであろうか。わたしには、吹きよせてくるやわらかい風のおこす波に見える。凧いだ海と湖。そして草むらの波に見える……」又、「……渦巻いては円をつくり、円をつくっては渦巻きとなって崩れ、崩れてはまた円をつくってゆく雲形文の運動である。生きている眩暈にはかならない」。この表面上の類似の奥に、何か普遍的な意味が見出だし得るであろうか。

(8) 古逸叢書三編『南華真経注』（中華書局影印南宋刻本 一九八七年）に依る。

(9) 小川環樹『風と雲―中国文学論集』（朝日新聞社 一九七三年）所収。三三三頁。

(10) 同右、三二一―三三三頁。

(11) 『青木正兒全集』巻二「民俗考」五七五頁。「古人」については「清の沈徳潜『説詩碎語』巻上」との青木の自注がある。

(12) 静嘉堂刊本『詩集伝』に依る。原文「言秋水方盛之時、所謂彼人者乃在水之一方、上下求之而皆不可得、然不知其所指也」。

(13) 白川静『詩経研究』（朋友書店 昭和五六年）第七章「詩の発想と表現」の五二五頁に「伊人とは水の女神をいう」とある。

(14) 目加田誠『定本詩経訳注（上）』五十一頁に三家詩説を解説する。ただし目加田自身は「木を樵きりながら唱う労働歌の一つであろう」としている。（目加田誠著作集巻一 龍溪書舎 昭和五八年）

(15) 蘇東夫『詩経辨義』（浙江古籍出版社 一九九二年）、后記は一九九〇年。

(16) 拙論「楚辞韻律論」（『同志社外国文学研究』三二号 昭和五七年）参照。

(17) 抱経堂本『經典釈文』毛詩音義巻上に「有橋、本亦作喬、毛作橋」と見える。

(18) 吉川幸次郎『詩経国風上』(岩波書店 中国詩人選集1 昭和三十三年) 八七頁。

(19) 谷川健一『南島文学発生論』(思潮社 一九九一年) 2 「現つ神と託女」一二三〜一二六頁。

(補一) 柿本人麻呂の主要な作品は六八九年〜七〇〇年の間に成ったと考えられるので、王績、王勃との時代差は少ない。杜甫「登高」の「無辺落木蕭蕭下」も、このようなイメージを發展させたものである。

(補二) 例えば鄭箋は、「宛、坐見貌、以敬順求之則近耳、易得見也」とする。

(補三) 蔓草について、杉浦康平は次のように言う。「蔓草の触手は、螺旋をえがきつつ先端を他の樹肌や物体にからませ、急速に繁茂して全体を覆いつくす。眼をみはらせる増殖力。渦巻くものが孕む力強いダイナミズム。古代の人々は蔓草に無限の繁栄、長寿や不滅など、瑞祥あふれる豊かな力を感じとった。」(『日本のかたち・アジアのカタチー万物照応劇場』三省堂 一九九四年 「六、唐草文、生命力の奔流」四二頁)

(補四) 間一多「詩新台鴻字説」(『間一多全集』乙集・古典新義)によれば、「淮南子」墜形訓の高誘注に「屈龍、游龍、鴻也」とある。

(補五) ちぐはぐな気分は、「九歌」湘夫人にも見える。「鳥何萃兮蘋中、薈何為兮木上」。この場合も、予期したようには思う人に遇えないのである。